

LA DOLCE VITA

海とイタリアをこよなく愛し、ワイン、アート、マリン文化に深い造詣を持つ伊藤英一氏。氏がこれまで体験してきた地中海のマリタイムの煌めきを中心に、海と食とポートに関わる彼らのライフスタイルを語る。

text & photo: Eiichi Ito

#28 イタリア映画のこと

イタリア映画の思い出

僕が小学生の頃と言えば映画はカラーよりモノクロームが多かったと記憶している。今のようなアメリカ映画全盛ではなく、イタリアやフランス映画が普通の様に見られていた。自宅から数分の所に洋画の封切館があったからよく観に行っていた。何時も2歳上の姉と一緒に。ミケランジェロ・アントニオーニやフェリーニ、パゾリーニ監督映画が好きだった。子供には難しい……と分かっていたのだが、何か感覚的に感じるものがあった。その当時不思議な映画だなあ……と思っていたフェリーニの『甘い生活 (La Dolce Vita)』は、今見てもシュールでアーティスティックな傑作だと思う。

女優と言えばロロブリジーダが好きで、今でもその趣味は変わっていない。つい先日、同じマリナーに係留している友人といつもは音楽の話に終始していたのに、たまたま映画の話になった。何と彼もジーナ・ロロブリジーダが好きだと言う。ジーナ好きと言う人に出会ったのは長い人生で初の事だったので感激し、友人とはより距離が縮まった気がした。

トリノへ行く

この夏、ミラノから西に車で1時間半ほど

に位置するピエモンテ州の州都トリノに暫く滞在する事になった。娘夫婦がトリノに長期滞在していたので合流したのだ。トリノはフィアットのある工業都市というイメージが強かったが、実際に滞在してみるとバロック建築に溢れる美しい文化都市だった。街の道々は全てアーケードとなっていて、全く雨に打たれる事なくショッピング出来る事に感激もした。



サヴォイア家が中世にナポリから建築家を招聘して宮殿を中心に見事な街を創り上げたという。イタリア統一時には一時イタリアの首都にもなっている。そんな歴史を持つトリノがローマに次ぐ映画産業の拠点であり、国立の映画博物館もあるということが娘夫婦の友人から聞くこととなった。

イタリア最初の映画上映がトリノだった事、ヴェネチア国際映画祭に次ぐステイタスのあるトリノ国際映画祭が毎年開催されている事、チネポルト (Cineporto) という北イタリアで制作されるあらゆる映像のビジネスセンターがあるのも知る事となった。トリノは古くからイタリア映画揺籃の地だったのだ。映画以外にもジャズ祭やオペラ上演も盛んである。

トリノ国立映画博物館

トリノ市内の中心地にある映画博物館は、高い尖塔を持つ重厚な建物だった。19世紀後半に建てられた建物は、エッフェル塔が出現する迄はヨーロッパの高い建物だったという。

館内に入ると自分の映画人生がタイムスリップして、思わぬ幸せなひと時を過ごす事が出来た。その規模の大きさと吟味された展示は流石に国立と名乗るだけの充実度である。

ジーナ・ロロブリジーダの『恋とパンと嫉妬 (Pane, amore e gelasia)』のポスターを見つけた時は昔の恋人に再会した気分になり、マリリン・モンローのコーナーでは展示品に思わず足を止めてしまった。マカロニウエスタンのコーナーも無論設けられていた。

近年のイーストウッド監督主演作品『グラントリノ (Gran Torino)』ではフォードトリノが主



「トリノ国立映画博物館」は規模も展示内容も流石に国立と名乗るだけの充実度で、幸せなひと時を過ごす事が出来た。右上のポスターは、ジーナ・ロロブリジーダとヴィットリオ・デ・シーカ主演のコメディ「恋とパンと嫉妬 (Pane, amore e gelosia)」。1954年に「恋とパンと夢」の続編として作られたが、この続編の方は日本では公開されなかった。マリリン・モンローの実際に身に付けていたハイヒール等の展示には思わず目が釘づけになってしまった。高い壁一面飾られた往時の名優の顔写真や名画のポスターも圧巻。博物館での白眉は、ヴィスコンティの『山猫』での書斎のセットと、アラン・ドロンとクラウディア・カルディナーレのカットを見つけた事だった。

人公を象徴的に描いていた。かつてフィアット王国だったトリノを称えてデトロイトで生産されたフォード車にトリノと名づけたという。イーストウッドがトリノを選んだのは多分マカロニウエスタン時代のトリノを思い出しての事ではないか……、と僕は思っている。

ヴィスコンティ監督作品『山猫 (Il gattopardo)』のコーナーを見つけた時は思わずカメラのシャッターを何度も切ってしまった。このヴィスコンティのエポック的な映画はイタリア統一の嵐の中、シチリア貴族がその変化を受け入れざるを得ない状況下での家

族模様を描いた傑作である。伊仏米の俳優のキャスティングも興味深い。伯爵の家長にパート・ランカスター、アラン・ドロン演じる男爵タンクレディ (Tancredi) がクラウディア・カルディナーレ演じるアンジェリカと結婚しその披露宴が描かれる。若かった僕は、忽ちその華麗な映像に惚れ込んだものだ。

このタンクレディの名を取ったワインがある事を、映画を観てから随分と後に知った。シチリアのワイナリー「ドンナフガータ (Donnafugata)」のトップワインだ。シチ

リアの太陽をいっぱい浴びたネーロダーヴォラとカベルネソーヴィニオンから醸し出される重厚なワインは、映画のコレクション同様、今ではなくてはならないワインコレクションの一本となった。P.B.



Profile

伊藤英一

事業家。ポート歴は10代から既に半世紀以上。欧米の多くのリゾート地を訪れ、その土地の食やワイン、アート、音楽等に触れることを至上の喜びとしている。RIVAとRIBの熱烈な愛好家。